

(34) 象徴主義者イエス (『反キリスト者』の 34)

イエスは「偉大な象徴主義者」である。彼は「内的実在性」のみを「実在性」あるいは「真理」とみなし、残りのもの、「自然的なもの」や「空間的なもの」、「時間的なもの」や「歴史的なもの」を、「しるし」あるいは「比喩への機会」と解した。そこから考えると「人の子」という概念は、歴史に属する「具体的人物」や「何らかの個別的なもの」や「一回切りのもの」ではなく、「永遠の事実性」あるいは「時間概念から解放された心理学的象徴」である。同じことは「神」や「神の国」あるいは「神の子であること」にも当てはまる。ⁱ

次のような「教会的不消化」よりも「非キリスト教的なもの」はない。すなわち、それは「人格としての神」、「来たるべき神の国」、「彼岸」である「天国」、「三位一体の第二の人格の神の子」である。これらは「象徴」を嘲る「世界史的冷笑」である。そもそも「子」という言葉は、万物がすべて「変貌」するという「感情（至福）のなかへ入ること」を表現し、「父」という言葉はこの「感情そのもの」、「永遠性の感情」、「完成の感情」である。ⁱⁱ

したがって、「天国」とは「心の状態」である。「地上の彼方に」、「死後」到来するものではない。そもそも「死」は「橋」や「移行」ではない。そして、「神の国」は待ち望まれるものではなく、「昨日」でも「明後日」でもなく、千年経っても到来するものではない。それは「心における経験」であり、「到る所にあり、どこにもない」。ⁱⁱⁱ

(35) イエスの悦ばしき知らせ (『反キリスト者』の 35)

この「悦ばしき知らせの使者」であるイエスは、「彼が生きてきたように、彼が教えてきたように死んだ」。彼は「人間を救済するためではなく、人はいかに生きるべきかを示すために死んだ」。彼が人類に残したものは「実践」である。それは彼が裁く者や捕縛者、誹謗や嘲笑に対して彼が示した「態度」、さらには「十字架上での彼の態度」である。それは「自分を守ることもなく、怒らず、責任を問うこともない。・・・悪人に反抗せず、・・・彼を愛する」ことである。^{iv}

(36) 神聖な嘘 (『反キリスト者』の 36)

われわれ「自由となった精神」は、「十九世紀にわたって誤解されてきた何か」を理解する前提、すなわち「本能」や「情熱」となった「正直さ」、特に「神聖な嘘」に戦いを挑む「正直さ」をもっている。ところが、世間の人々は、「極めて異質で極めて繊細なこと」を見破ることができる「中立性」と「精神の訓育」から遠く隔たっている。彼らは自分の利益だけを求め、「福音」とは「反対のもの」から「教会」を築き上げてきた。つまり、キリスト教と呼ばれる「巨大な疑問符」のうちには「世界史的皮肉」が働いており、人類は「福音の起源、意味、権利」であったものとは「反対のもの」の前に跪いているのである。^v

ⁱ Ibid., 34, S.206

ⁱⁱ Ibid., 34, S.207

ⁱⁱⁱ Ibid.

^{iv} Ibid., 34, S.207-208

^v Ibid., 36, S.208